

「失われた20年」と韓国からの照射

——1960年、纏れあう日韓の思想——

沈 熙 燦

1

1990年代におけるソ連と東欧の没落は、柄谷行人の言葉を借りれば、とりあえず「先進資本主義国家」に「労働者を優遇」する「福祉政策」を強いていた枠組みの解体を意味していて、以後「人々の生活は犠牲にされてもやむをえない」という生存権の深刻な危機や、「勝ち組・負け組」など甚大な格差社会を産み落とす契機となった。柄谷は、人類の歴史はまさに「新たな「段階」」に進入したともいう¹。

この「新たな「段階」」が、日本において「失われた20年」と呼ばれる時期と重なっていることは多言を要しない。鶴飼哲は、冷戦構造の崩壊にもかかわらず、東アジアにおいては「政治体制間の差異という形で冷戦」が「未了」したため、「東欧のように冷戦の終焉がただちに民族間の熱戦に転化すること」は回避できたものの、日本はこの「猶予の時間」を「有効的に使うことに失敗」したという²。1990年代に入ってから「植民地支配やアジア太平洋戦争期の被害の実相が個人の口を通して語られようになり、われわれの耳に届くようになった」³が、その「応答」⁴の責任を日本は放棄してしまったのだ。

「失われた20年」は、このようにアジア諸国における民衆の視点に立ってみると、帝国日本の植民地支配や侵略戦争、そして冷戦下の認識論的な暴力に対する異議申し立ての動きが挫折した経験として読み替えられる。しかし、日本は「猶予の時間」を「失われた20年」という喪失の感覚に代替しつつ、政治的なポピュリズム⁵やナショナリズムの強調という右傾化に走ることで、社会的・国際的な崩落の原因を周辺のアジア諸国に押しつけようとしてきた。これはまさに「精神的な没落」⁶にはかならない。歴史認識問題や従軍慰安婦問題、領土問題などは、「失われた20年」における日本の「精神的

1 柄谷行人『世界史の構造』（岩波書店、2010年、420-421頁）、同『「世界史の構造」を読む』（インスクリプト、2011年、343頁）などを参照。

2 鶴飼哲「新たなアジア的対話のために」『現代思想』第33巻第6号、2005年、38頁。

3 同上、39頁。

4 高橋哲哉「応答の失敗」『現代思想』第33巻第6号、2005年、48頁。

5 「失われた20年」におけるポピュリズムの問題については、拙稿「屠所の糞と「ポピュリズム」の行方——韓国小説『糞礼記』を読む」（『日本研究』第53集、国際日本文化研究センター、2016年）を参照されたい。

6 柄谷前掲『「世界史の構造」を読む』、365頁。

な没落」を象徴するものであろう。もし「失われた20年」において、日本が真に失ったものがあるとすれば、それはアジア諸国との関係を再構築しうる切っ掛けではなかっただろうか。

他方、この「失われた20年」において「東アジア共同体」の構想が盛んに議論されている。冷戦の終焉とそれに代わる新しい地域秩序の建設を、連帯と平和を前提に進めようとするこうした努力は、もちろん高く評価すべきであろうが、そこには同時に資本と国家の論理が潜んでいることをも看過してはならない⁷。新しい地域秩序に対する要請は、少なくとも資本や国家の要請と歩調をあわせてきた側面を有している。だとすれば、「失われた20年」を考えるとということは、新自由主義のグローバルな展開という資本の問題に、ナショナリズムの暴力性などが複雑に絡みあっている様相を総体的に捉えなおすことを意味するものでなければならないだろう。

偏狭なナショナリズムへの批判が、資本と国家による地域共同体の構想に吸収されてしまい、あるいは連帯の精神にもとづいた関係構築の試みが、ナショナリズムの排他性によって挫けられてしまうことを、私たちはすでに幾度も目撃してきたはずだ。このことは、かつて竹内好が指摘したアジアに対する「二重構造」⁸の束縛から日本が未だに自由ではないこと、そしてその「二重構造」の裏返しでもある「反日」の感情が依然としてアジア諸国に根強く存在していることを物語る。「失われた20年」が投げかけている問いとは、このように帝国日本とその植民地主義がアジア諸国に残した矛盾に立ち向かいながらも、資本主義やナショナリズムの暴力性を同時に止揚するといった、きわめて複雑な問題であろう。

2

韓国における日本研究が本格的に行われはじめたのは、ちょうどこの「失われた20年」においてである。韓国の日本研究は80年代から少しずつ成長し、90年代には量的な膨張と質的な変化を遂げていくようになる。また、金大中政府による日本文化開放政策の推進とともに、文化の諸領域を中心とする民間での交流が拡大していくと、日本研究の必要性も同時に増大していった⁹。多様な分野で画期的な研究成果が次々とだされ、研究者間の交流も急増している。とりわけ、ナショナリズムや国民国家に対する問題意識が広まることによって、「自己の中の日本」を見出そうとする視点が現れ、最近では「特殊な日本の探求」ではなく、トランス・ナショナルな学際的研究を通して「日本

7 米谷匡史「ポスト東アジア」『現代思想』第33巻第6号、2005年。

8 竹内好「近代の超克」(1959)『日本とアジア』筑摩書房、1966年、172頁。

9 韓国における日本研究の歴史と現状については、陳昌洙編『韓国 日本学の現況と課題』(한울아카데미、2007年)、趙寛子「1990年代以降の韓国の日本研究——制度と視線の変化」(『世界の日本研究』第17号、2013年)などを参照。

研究の普遍化」を図ろうとする動きも顕著になっている¹⁰。

ただし、90年代以後の、つまり「失われた20年」における日本研究から、日本を「ポスト近代」の「反面教師」とみなすか、はたまた企業の論理である「追いつき」の達成を喜ぶ雰囲気や、一方で探知されるものもたしかである¹¹。しかしながら、「先行する」日本に「追いつこう」とする、模倣と専有（appropriation）だけでは、韓国社会の成熟は期待できない¹²。このため、なによりも日韓がともに「文明の潜在的な危機」に迫られているという切実な問題意識を共有する必要がある¹²。これからの韓国の日本研究は、未だ地域研究の枠を脱皮しきれていない現状を顧みながら、人文学としての地位を確保していくべきであろう。その一環として本稿では、歴史の「新たな「段階」」に現れている諸矛盾——資本主義の浸透とナショナリズムの勃興——を視野に収めつつ、そこに回収されえないある不気味な鼓動を、1960年代における日韓の連帯と葛藤の纏れから浮き彫りにしてみたい。

3

日韓の民主主義を考えるさいに、1960年がもつ重要性は、いくら強調しても強調しすぎることがない。しかしながら、韓国の「4月革命」と日本の「安保闘争」がタイムラグなく、ほとんど同時に行われたという点を思想的に考察しようとした研究は、案外と少ないといわざるをえない。むろん、この二つの出来事が直接的な関係を有しているとはいいがたい。太田修は、4月革命直後に出された新聞記事を含め、在日朝鮮人・知識人たちの動きなど日本の反応を網羅した研究のなかで、日本でも4月革命に対する高い関心があったことを指摘しつつも、その「安保闘争との共鳴」は「直接的な関連性よりは、ある心情的な水準における連帯の感覚」であったと論ずる¹³。

金杭は、このように「直接的な関連性」が見当たらない4月革命と安保闘争の関係を「積極的に「構成」していく」ことを提言し、韓国の「国民教育憲章」（1968年）の理論的基礎を作った朴鐘鴻と丸山眞男の議論を検討することで、二つの出来事における「根源的時間性」の問題を明らかにする¹⁴。金杭の論考は、冷戦という国際秩序や、帝国主義／植民地支配という歴史的な文脈の呪縛から4月革命と安保闘争の哲学的な意味を抽出しようとする点で、既往の見方——民主主義闘争——を根本的に揺さぶるものとなっている。金杭は4月革命と安保闘争の意味を——それぞれ朴鐘鴻と丸山の読解を通して

10 趙寛子前掲「1990年代以降の韓国の日本研究」、51-57頁。

11 同前、57頁。

12 同前、58・52頁。

13 太田修「日本에서 본 '4月革命」許殷編『正義와 行動 그리고 4月革命의 記憶』善人、2012年、277頁。

14 金杭「알레고리로서의 4·19와 5·19: 朴鐘鴻과 丸山眞男의 1960」『尚虚学報』第30号、2010年、179-180頁。

——以下のように述べる。

4・19〔4月革命〕とは、このようにアприオリな標準や規範が有する効力が停止する瞬間、とりもなおさず、あの幾何学の狂気に満ちた理性が自然と事物の世界を占有しようとする根源的時間性を顕現させる事件であったのだ。したがって、朴鐘鴻にとって4・19は、単に民主主義の原則を実現しようとする学生たちの示威ではなかった。4・19は、なによりもまず「民主主義」や「法治主義」という「標準と規範」の効力を停止する事件であり、その標準と規範がはじまる根源的時間性を顕現させる「絶対的現在」であったのである〔……〕民主主義、社会主義、共産主義などのあらゆる意匠は、4・19という根源的時間性を前にしてその効力を失ったのである。¹⁵

丸山は、潜在性が現実へと変化する時を捉えることが近代的な態度であるとみなしていたが、この瞬間は、ある秩序や規範が生じようとする混乱の時間でもある。〔……〕丸山にとって5・19が、これと同様の事態を意味していたことはいうまでもなかろう。しかし、変化の瞬間とは、決してある目的の達成とともに消滅しなければならない時間性などではない。むしろ目的よりもこの時間性の方が根源的であるからだ。すなわち、「潜在的なもの」が「現実的なもの」へと転回するこの深淵こそ、丸山が掴みとろうとした「近代」という時間性であったといえよう。¹⁶

金杭は、既存の価値体系が崩壊し、新たな規範が生じようとする瞬間を「根源的時間性」と捉えながら、この地点において朴鐘鴻と丸山が予期せぬ遭遇を果たしたという。そして金杭は、いわば反動的哲学者といわれるこの二人が「効力停止の瞬間」に対する感覚を保持していたことを高く評価しながらも、それとともに開かれていくべきである「創設の道」に関しては、具体的なビジョンを提示することができなかったと指摘する¹⁷。以下では、4月革命の展開過程や、それを担っていたとされる学生たちの認識を日韓関係の拮抗から検討することで、この「創設の道」の輪郭を考察してみたい。

4

4月革命は、韓国の民主化闘争の歴史においてもっとも重要なものとして位置づけられている。なによりも、大韓民国の憲法そのものが「3・1運動」や「4月革命」を自らの正当性として掲げている。そして4月革命は、一般的に当時の学生や知識人たちに

15 同前、197頁。

16 同前、207頁。

17 同前、207-212頁。

よって遂行されたと理解されている。これは啓蒙主義的な観点から 4 月革命が捉えられていることを意味する。しかし、当時の多くの記録は、4 月革命がむしろ啓蒙主義的な民主主義の論理や国家の言説とは随分異なる側面を有していたことを物語っている。以下の三つの記録をみてみよう。

隊員のある一人が復興部の前に並んでいた高級乗用車とジープを手当たり次第にとり壊しはじめると、みんながそこに飛びかかった。ガラスが割れ、バンパーが壊され、瞬く間にあの立派な車体がめちゃくちゃになった。その時、幾人かの青年が走ってきて、慌ててかれらを留め立てした。

「私たちは破壊のためにデモをするのではありませんよ！」

学生のデモ隊員のような感じだ。ただし、車を砕いていた連中の考えは違った。「われわれが払った税金だろうが。あいつらをこんな車に乗せるために税金を払ったんじゃない。邪魔すんな」

「だからといって壊してしまう必要はないでしょう。これはわれわれの財産であり、国家の財産でもありますよ。乗っていたやつが悪いだけで、この車を壊して何がどうなるんですか？ しかも、このなかには外国人の車もあるんですよ。外国人への面目を考えてくださいよ」

「外国人がどうした。援助物資をもってきては、高官たちと山分けしただろう。われわれには餅一個さえくれなかったんだ。もらったのは食べる最中に吸い殻が出てくる、ごみみたいな粥だけだよ」

「しかし、そんな八つ当たりのために私たちがデモをするわけではないですよ」

「畜生！ では今度違う大統領になるとただで食わせてくれるのかい？ 腹減ったやつには感情しか残らないもんだよ」¹⁸

学徒諸君たちの正義の隊列に、一部のごろつきが入り交じって略奪・放火・破壊などの乱行を事としています。これは諸君たちが頑張って闘いとした名誉を汚させる結果を招いています。実に残念でなりません。[……] もちろん本戒厳司令部はこうしたごろつきを一掃し、学徒諸君の名誉が毀損されないよう尽力していますが、今のごとく秩序が混乱した状態では慨嘆を禁じえないのであります。親愛なる学徒諸君、このような秩序の混乱を正すために皆様の積極的な協調をお願いする次第であります¹⁹。

しかも 4 月 27 日に李承晩の降伏を勝ちとった後は、革命の混乱した事態の収拾において、青年学徒だからこそ可能であったろうが、見方によってはやりすぎだと

18 吳尚源「無明記 (三)」『思想界』第 100 号、1961 年、416-417 頁。

19 「秩序바로잡자」『東亜日報』1960 年 4 月 27 日。

思われるほど、とても清廉で公正、円熟した側面をみせてくれた。かれらは現場において興奮している市民たちに帰宅を要請し、ほうきをもってきれいに掃除を行ってから、学園へ戻った。誠に涙ぐましいほど、青年たちの意気と純潔さはすばらしかったのであり、また学園に戻り再び真理を目指しつつ後日を期そうとする意欲は、いかにも崇高なものであった。²⁰

この引用文は、それぞれ4月革命を扱った小説「無明記」、当時の戒厳司令官の声明、ソウルの名門大学である梨花女子大学の学報社説から抜粋したものである。これらの文章から、4月革命には戒厳司令官から「ごろつき」と呼ばれた人びとが参加していたこと、かれらはデモ、および革命の意味について学生たちとは相当違う見解をもっていたこと、そして革命の收拾が学生たちによる浄化の作業とともに行われたことなどが分かる。それは国家と民主主義の名の下で「ごろつき」たちを革命の時空間から追いだす過程でもあった²¹。しかし、革命の瞬間において「根源的時間性」を体現していたのは、むしろその「ごろつき」たちであったといわなければならない。

一つにまとわりついた生と死が、ゆらゆらする汁液のようになり、銃声のなかへと融解されていきそうであった。[……] あちこちでまるで邪悪な魂を保つ幽霊のように靡く火の光がみえてきた。人びとは火の光をみて矢叫びをあげながら、片っ端から拉いていた。[……] 人びとは動物が出しそうな奇怪な嘆声を打ちあげていた。かれらは目の前に迫った無秩序に狂ってしまい、社会の因習や生活の規範をすっかりと忘却したようであった。[……] 劇場のなかにあったいろんな形象物はどんどん壊れていき、ごみの山に化していった。いわば抽象物になりつつあったのである。列をなしていた椅子は人びとによって破壊され、椅子としての機能を分解させられた。椅子は、ただ少しの金属板と木の合成によって構成されたものにすぎなかったのだ。²²

上記の引用文は、1960年4月25日の夜、ソウルにある「平和劇場」をとり壊していた民衆たちの様子を小説化したものである。ここには、革命を通して民主主義の回復を目指していた当時の学生・知識人たちの思惑に抗うかのように、むしろその民主主義の価値体系を叩き壊している民衆たちの異様な時空間が描写されている。「原始的で本能的な無秩序」、すなわち「誤謬に陥っている秩序を破壊し、人間を束縛するものを解きほぐして、窮屈な社会生活の規範とやるせなさ、不正腐敗に対する鬱憤から飄々と解き

20 「合理的 經濟樹立만이 民主革命의 課業이다」『青脈』第3巻第2号、1966年、194頁。

21 この過程については、拙稿前掲「ポピュリズム」の行方——韓国小説『糞札記』を読む」を参照されたい。

22 朴泰洵「무너진 劇場」(1968年)『韓国小説文学大系』50巻、東亜出版社、1995年、44-46頁。

放たれ、一つの唐突な無秩序」「高貴な無秩序」がここに生起しているのである²³。この「無秩序」の時空間においてこそ、真の抵抗が開始するであろう。

先述したように、当時三池争議と安保闘争が展開していた日本でも4月革命の勃発とその推移は、多くの関心を集めていた。4月26日に行われた第15次安保阻止全国統一行動において、東京大学教養部の学生たちが掲げたプラカードには「韓国の学生につづけ」と書かれていた²⁴。日高六郎が述べるように、4月革命と安保闘争の間に「反民主主義的な政府、あるいは独裁的軍事的な政権にたいして強くたたかう人びとが存在すること」や、「アメリカ主導の世界戦略」および「日本の新植民地主義に反対する人びとが、海をこえて両国に存在していることを実感的に感じる」といった「新しい連帯と友愛の芽生え」が生じたことは否認しえない²⁵。

さて、安丸良夫は1960年の6月18日に国会議事堂前の路上で一夜を過ごした経験を次のように語っている。

日本社会の多層的な現実が、よくもあしくもそこに凝縮していたのであって、歴史にはときとしてそうした凝縮された時空があるように思う。国会議事堂前の路上に包囲する民衆の一人として一夜をすごしたというようなことは、それがなにごともなく終わってみれば、あまりにささやかな経験にすぎなかったともいえる。しかし、それはまぎれもなく私自身の現実経験であり、固有の濃縮されたかたちでの日本の現実の全体性の経験であったと思う。²⁶

安丸は、安保闘争の場において凝縮された形で「全体性」が現れたというが、その「全体性」とは具体的に何を示しているだろうか。戸邊秀明によれば、安丸民衆史の軌跡は「戦後歴史学との異質性や講座派的歴史観からの離脱」と要約できるが、それは「マルクス主義的思考様式の放棄を意味」するものではなく、「全体性」という概念もそうした思考の自立の過程において形成されたという²⁷。このような戸邊の観点は、たとえば安丸自身が黒田俊雄を分析するさいに用いた観点でもある。すなわち、安丸は黒田が目指した「マルクス主義歴史学の再構築」の試みを検討することで、内部においてマルクス主義の諸問題と「もっともよく戦い、決して戦いをやめなかった人の、英姿」を見出すとともに、マルクス主義が本来有すべきである「世界の全体性についての包括的な知」「私たちの人生についての根源的な問いへの回答」を想起させる²⁸。いうなれば、

23 同前、48・55頁。

24 「韓国につづけ東大教養部」『朝日新聞』1960年4月26日、夕刊。

25 日高六郎「四・一九と六・一五」『戦後思想を考える』岩波書店、1980年、149頁。

26 安丸良夫「あとがき」『日本の近代化と民衆思想』青木書店、1974年、292頁。

27 戸邊秀明「戦後歴史学のなかの安丸民衆史——ある全体性のゆくえ」、安丸良夫・磯前順一編『安丸思想史への対論——文明化・民衆・両義性』ペリかん社、2010年、73頁。

安丸における「全体性」とは、マルクス主義を「マルクス主義的思考様式」によって克服しようとする姿勢と密接に関わっているのである。安丸が国会議事堂の前で目の当たりにしていた風景は、おそらく以下のようなものであったと思われる。

そこでは〔自由民権運動における演説会など〕、人びとの権利や自由は、特定の政治的・社会的な権利や自由として、制度論の範囲で規定しうのようなものではなかった。〔……〕それは人間としてのあらゆる活動の基礎にある本源的な志向性のことであり、自由とは「全ク生類社会ノ其本然ノ性質」（『自由東道』）とされるようなものであった。そこには、自由の千年王国説とでもいふべき様相があって、人びとの根源的な解放願望に訴えかけて心底よりゆり動かす衝撃力が秘められていた。²⁹

「特定の政治的・社会的な権利や自由」、また「制度論の範囲で規定しうのようなものでは」という叙述から、ここで安丸が強調する「自由」が実現するためには、既存の形而上学の瓦解が伴われなければならないことは明白であろう。文脈は異なるが、西川長夫が1968年5月にパリで経験した革命の瞬間もまた、こうした「自由」、および理念としての共産主義が有する転覆の力に満ちたものであったと思われる。西川はパリ5月革命をテキスト化するさいに「私論」という方法を提唱したが、それは「私」が見た革命の様子などではなく、逆に革命によって生まれる「私」を保持しつづけるための実践であったといえる。この「私」とは、まさに既存の秩序や価値観が崩壊する瞬間を内包する存在にほかならない³⁰。

5

1960年代における世界的な抵抗運動の拡散を、ウォーラーステインらにならって「反システム運動」と呼ぶことができるなら³¹、東アジアにおいてそれを先取りする形で4月革命と安保闘争がすでに1960年に行われていたともいえるだろう。そして、「失われた20年」の諸問題をともに担っていかなければならない今日の日韓において、そのよ

28 安丸良夫「黒田俊雄の中世宗教史研究——顕密体制論と親鸞」、安丸良夫・喜安朗編『戦後知の可能性——歴史・宗教・民衆』山川出版社、2010年、232・204頁。

29 安丸良夫「民衆運動における「近代」」『文明化の経験——近代転換期の日本』岩波書店、2007年、272頁。

30 西川長夫『パリ五月革命私論——転換点としての68年』平凡社、2011年。なお、西川と「私論」の問題については、拙稿「ボナパルティズム論から私論へ——西川長夫の「国民国家論」と植民地朝鮮」（『立命館言語文化研究』27巻1号、2015年）を参照されたい。

31 G・アリギ、T・K・ホブキンス、I・ウォーラーステイン編『反システム運動』（1989年）太田仁樹訳、大村書店、1992年。

うな経験を共有しているということは、多大な示唆を含むものであると思われる。

ところが、ここで指摘すべきは、4月革命の後、社会の中心的な勢力として成長する学生や知識人たちが、「日本文化」に対して「憧れ」を抱いていたという点である³²。最後にこの問題を検討することで、1960年に切り開かれた「創設の道」がどのような結末を迎えたのかを紹介したい。

当時のデモを主導した「若き獅子たち」³³は、主に植民地末期に生まれたため、帝国日本からの直接的影響は深くないが、解放後のイデオロギー対立や朝鮮戦争の渦中で幼年期を過ごした、いわば「父親を喪失した世代」³⁴であった。かれらは、遅れてきた者の喪失とニヒリズムの感覚を共有しつつも、同時に「前近代的、あるいは戦後的な体制」の克服、また「文化的・民族的なアイデンティティ、認識の民主化」「理性や自由に対する意識」を韓国社会にもたらすことで「新たな時代の出発」を告げたともいえる³⁵。とりわけ、歴史学や文学の分野において、こうした志向が鮮明に現れた³⁶。未だ封建的な旧習や、「倭色」「倭習」といった帝国日本の痕跡が至るところに刻まれている現状において、かれらが民主主義にもとづいた国民国家の建設を目指していたことは、理解しがたくない。

ところで、この「ハンゲル世代」を代表する小説家金承鉦の以下の回顧は、とても興味深い論点を提供している。

4・19の後に生じた変化のなかで、日本文学が翻訳・出版されはじめたということは、私に大きな刺激を与えました。日本語を知らない私たちの世代にも日本文学が読めるようになったのです。4・19の前には日本文学がほとんど翻訳されていませんでした。おそらく私たちより年上の世代は日本語が読めたから翻訳するまでもなく直接読んだでしょう。私たちは日本文学を全く知らずに成長しました。ところが4・19の後には、芥川文学賞受賞作品集などが本格的に翻訳され、また新丘文化社は日本戦後問題作品集を出して〔……〕実は大学生の時から小説を書くようになったもっとも大きな動機は、その時期に翻訳されはじめた日本の小説を読んで受けた衝撃や刺激でした。〔……〕昔、漠然とヘルマン・ヘッセやアンドレ・ジッドを読みながら西洋文学から受けたものとはずっと違う実感が湧いてきて、皮膚で感じられたのです。³⁷

32 この点については、千政煥・権보드래『1960年을 묻다: 朴正熙 時代の 文化政治와 知性』(천년의想像、2012年、515頁)から多くの示唆をえた。

33 「젊은獅子들 다시象牙塔으로」『京郷新聞』1960年4月29日。

34 「座談 4月革命과 60年代를 다시 생각한다」崔元植 외 엮음『4月革命과 韓国文学』創作과批評、2002年、32頁。

35 同前、38-39頁。

36 ナショナリズムの色彩を強く帯びている李基白の『国史新論』と林鐘國の『親日文学論』が、それぞれ1961年と66年に出版された。

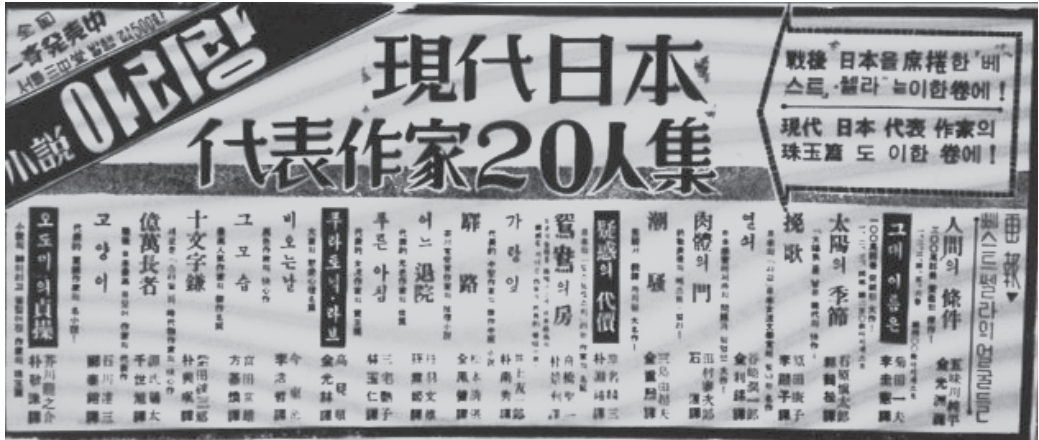


写真1 アリラン出版社が刊行した『現代日本代表作家20人集』の新聞広告（『東亜日報』1960年10月14日）

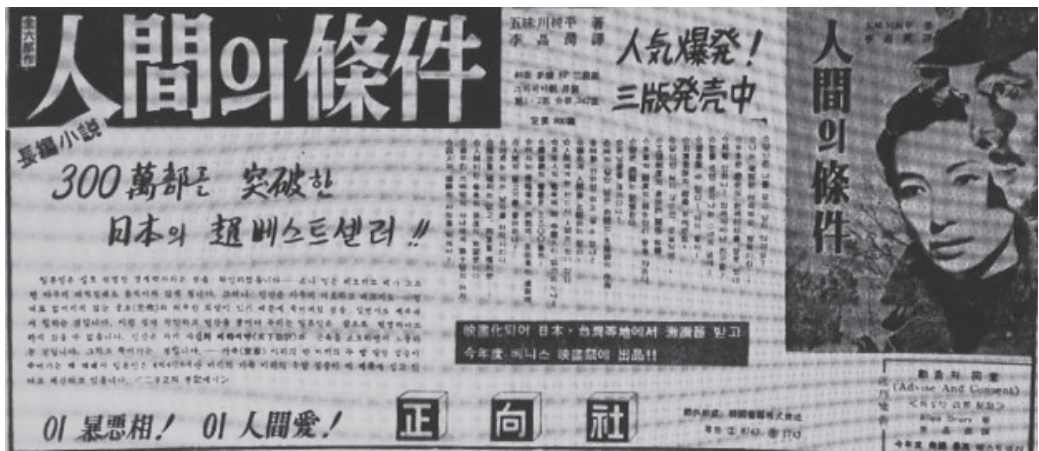


写真2 正向社会が翻訳・出版した『人間の条件』の新聞広告（『東亜日報』1960年10月17日）

4月革命により強力な反日政策を固執していた李承晩政府が退けられると、韓国の出版界ではまさに日本文学ブームが巻き起こされる。安本末子の『にあんちゃん』と五味川純平の『人間の条件』が、それぞれ1959年と60年に翻訳されベストセラーになり、石坂洋次郎、三島由紀夫、三浦綾子、石原慎太郎などの作品が次々と韓国にもち込まれた。

これらの小説は大きな人気を博したが、たとえば1963年のベストセラー小説トップ10に石坂の作品は四つもランクインし、1966年と67年のトップ10には三浦や五味川、石原などの小説が八つも含まれている³⁸。では、なぜこれほど日本の小説が売れた

37 前掲「歴談4月革命과 60年代를 다시 생각한다」、30-31頁。

38 李稔子『韓国出版과 베스트셀러, 1883~1996』京仁文化社、1998年、347-353頁。

だろうか。金承鉦の回顧に戻ってみよう。

ああ、小説とはこんなものなのか、自己が生きている時代をこれほど痛烈に、切実に書くことができるのか、という衝撃を受けました。〔……〕日本人たちの罪の意識に対する問題、いわばわれわれ日本人に罪の意識があまりにもないことは深刻な問題だ、ということでしょう。〔……〕あまりにも罪の意識をもたない、それでも人間か、という作家の視線が私には相当な衝撃でした。〔……〕そういう小説を読んでから、小説とは書くべきものだな、書かなければならないものだな、だったらわれわれの話をも一回書いてみよう〔……〕。³⁹

ここには、イデオロギー対立と朝鮮戦争を経験した世代が、日本の小説から実存主義的な感覚を読みとっていたことが垣間見られる。別言すれば、そこには「アプレ」、すなわち「戦後の青年の感受性」が「交流・交換」されていたのであり⁴⁰、そうした感受性こそ4月革命と安保闘争を推し進めた主要な原動力にもなったはずである。もちろん、日韓会談をめぐる闘争が激化していくなか、日本文化の残存と輸入は、依然として大きな社会的問題として批判を受けていた。「草履」を履き、主婦之友を読みながら倭食屋で「おでん」を食べ〔……〕日本製の掛け布団のなかで日本の小説を読みながら寝ると〔……〕韓国の「魂」は近いうちに日本化してしまうだろう⁴¹というポストコロニアルな不安も共存していたのである。とはいえ、他方で左翼系列の雑誌として以後弾圧を受けて廃刊となる『青脈』は、1966年4月に「日本大学生の自画像」という特集を企画し、大阪大学、東京大学、一橋大学、明治大学の学生たちの短いエッセーを翻訳・掲載している⁴²。その内容は「アプレゲール」な感受性と戦争反対、平和への希求がほとんどであり、日本の大学生たちも韓国の若者たちと同様な価値観を有していることが強調されている。このような感受性の交換を通じて「韓国の青年学生たちが「安保闘争」に象徴される日本の若者たちの反冷戦闘争や、68革命を目前にしていた「世界」、そして「現代性」と結ばれていく⁴³回路を見出していたことがもつ意義は、決してささやかなものではないだろう。

しかし、ここで三たび、以下の金承鉦の述懐に戻ってみたい。

私は大革命と名づけたいほど、4・19に対しては個人的に特別な思いをもっています。〔……〕私たちの世代はみな、そのような苦痛のなかで生きてきたと思います。一度も楽だった時期がなく、経済的に助けてもらったこともありません。つねに貧

39 前掲「座談4月革命과 60年代를 다시 생각한다」、31-32頁。

40 千政煥・權보드래前掲『1960年을 묻다』、529頁。

41 「日本 트러블〈6〉번지는 倭色 무드」『東亞日報』1964年2月6日。

42 「日本大学生의 自画像」『青脈』1966年4月号、135-145頁。

43 千政煥・權보드래前掲『1960年을 묻다』、530頁。

乏で、実現できなかつた価値を抱いたまま軍事的体制に耐え抜き、刑務所に入った友人を心配する生活でした。〔……〕言ってみれば、今日の新たな政治勢力を作りだし、また既成の政治家たちを導きながら、4・19の精神に立脚して民主化運動を行ったのが、まさにわれわれの世代なんですよ。文学界の内部にいてこの点がよくみえないでしょうけれども、外からみれば鮮やかなものです。文学者たちの社会的地位を向上させ、国家運命の決定において重要な役割を果たしているということをおもひに大衆たちに広く認識させる。これは換言すれば、4・19精神を継承することです。⁴⁴

金承鉦のこの発言から、4月革命において民衆たちの間で生じた「創設の道」や「全体性」の感覚が、国家の概念と結びついた民主化運動の論理のなかに陥没していく様相をみてとることができよう。「戦後的青年の感受性」が「共産主義の一形態」⁴⁵として変容していくことなく、むしろ「文学者たちの社会的地位」「国家運命の決定」と深く関わっていたことは、たとえば、その「戦後的青年」のアイデンティティ形成に多くの影響を及ぼした日本小説のなかで、五味川の『人間の条件』の場合「戦後から戦争の影をぬぐい去り、前へ進む」ために「戦後的視点から書かれた」という指摘をも考えあわせると⁴⁶、それほど不思議なことでもないように思われる。

4月革命の翌年、朴正熙による軍事クーデタが敢行され、韓国社会は国家主義とナショナリズム、成長至上主義の長いトンネルに進入するようになるが、それはまさに4月革命を主導した「若き獅子たち」との「二人三脚」⁴⁷の結果でもあった。しかも、この「二人三脚」は、冷戦構造の確立と日本の経済大国化という東アジアにおける戦後体制の確立の一環をなすものでもあった。ここで理念としての共産主義の連帯は、可能性としてはほとんど消滅してしまい、日韓会談が妥結した後、「外国定期刊行物輸入配布に関する法律」（1966年4月12日議決）が公布されると、日本小説の翻訳・出版も表面的には禁じられる。その後の海賊版の横行は、日韓における連帯の感覚の陰画ではないだろうか。

6

4月革命の世代に属する崔仁勲は、だれよりも植民地主義・ポストコロニアリズムの問題に敏感な文学者であった。かれは朝鮮総督が解放後の韓国にそのまま残って地下放送をつづけるという設定の『総督の声』連作を1967年から76年にかけて発表する。以

44 前掲「座談4月革命과 60年代를 다시 생각한다」、65-66頁。

45 M・ブランショ（1983年）『明かしえぬ共同体』西谷修訳、ちくま学芸文庫、1997年、66頁。

46 五十嵐恵邦『敗戦と戦後のあいだで——遅れて帰りし者たち』筑摩書房、2012年、53・52頁。

47 前掲「座談4月革命과 60年代를 다시 생각한다」、39頁。

下の引用文は、そのなかで 4 月革命に触れているところを抜粋したものである。

外見上の繁栄にもかかわらず、内地は病んでいて、帝国の精神的状況は累卵の危機に陥っています。なぜか？ 帝国は宗教を喪失したからです。帝国の宗教とはなにか？ 植民地です。植民地とはなにか？ 半島です。半島こそが帝国の宗教であり信念であり愛であり生であり秘密であったのです。そうです。半島は帝国の魂の秘密だったのです。今日、内地に現れている虚脱、道徳的な腐敗、ニヒリズムは魂の秘密を喪失した集団の絶望であるのです。〔……〕半島の領有は帝国の秘密でした。魂の夢でした。種族の性感帯でした。〔……〕今日、帝国はこの秘密を失いました。これを必ず回復しなければなりません。〔……〕失地回復、半島の再領有、これが帝国の夢です。〔……〕癲癇^{てんかん}を起こしたあの 4 月の頃、私はとても憂慮していました。〔……〕こうした自覚は帝国に対する露骨な脅威です。こうしたことがあってはなりません。帝国の絶対なる利権を主張すべき半島が、このように放恣な自由人になると、半島の再領有はもちろんできず、そうした隣人は帝国を窒息させるでしょう。だが安心してください。今日、私は愉快です。空にふわりと浮き上がったようなこの気分。心行きます。祝杯を挙げましょう。⁴⁸

1960 年、日韓で同時に現れた理念としての共産主義は、国家や資本、ナショナリズムによってその後もつねに抑圧されてきた。「失われた 20 年」という危機的状況において、その不気味な鼓動を再び刻んでいくためには、まず上記の「総督の声」に耳を傾ける必要があるだろう。帝国日本が東アジアに残した負の遺産である植民地主義と「二重構造」、そしてその反作用としての「反日」の問題を的確に捉えること、そこに「失われた 20 年」において日本研究に与えられている課題の一つがあると思われる。

48 崔仁勲「総督의 소리 (1)」(1967 年)『崔仁勲全集 9』文学斗知性社、1976 年、96-100 頁。